

幕末の動乱を生き抜いた中山三屋尼

會員 清木 素

中山三屋（みや子）の生いたち

新南陽市政所の善宗寺の裏山を登って行くと、中腹のほとりに自然石の墓碑がある。これが勤王の歌人中山三屋の墓である。

水のあはのさだめなき世にながらえて

めぐりあふ瀬をまつがはかなさ

と筆の運びも美しく刻みこまれている。

中山三屋は徳山市中山の人、戸倉恭輔（恭蔵ともいう）

の娘である。恭輔は農家に生まれたが、若くして江戸に出て、幕臣となり土籍に列した。一時南部侯に仕えていたが京都に移り、ある公家に仕え、妻をめぐり、みや子は天保（一四）年（一八四〇）三条丸太坊の寓居で生まれた。後京都東山に住み、恭輔とみや子は中山姓を名乗った。みや子は京都の公家、家中に縁故が多く、国学ことに歌と書と絵に

秀れた才能をあらわした。

六歳のころ、ある家の歌会で「歳暮」という題で、

くれてゆくけふの日かけをおしみつつ

はるまつころたのしかりけり

と、おとなも顔負けするような歌をすらすらと詠みあげた。並びいた人々は「末はどんな歌人になるか知らん」「とても子どもの歌とは信じられない」とか三屋のうわさは町中に広がったという。

これも又三屋が七歳のころ、おとなの歌会に幼児が一人入り、おとなは歌の文句を考えてもいい歌にならないので困っていた時に、

山賤があさ霜しのぎこりし木の

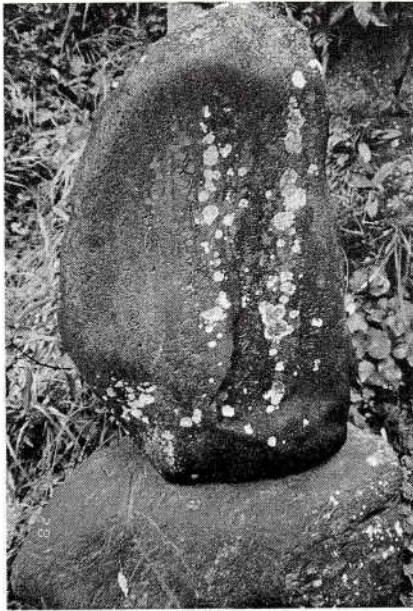
さむさにも似ぬねやのうづみ火（埋火）

と詠んで、当時の和歌の大家高崎正風に知られ、後香川景恒の門に入り、いわゆる桂園歌風について学んだ。中世和

歌から近世和歌への転換に大きな役割を果たしたのは、国学派と対立した桂園派の和歌であった。

徳山藩で桂園派に加わったのは望月貞明と中山三屋の二人であったという。

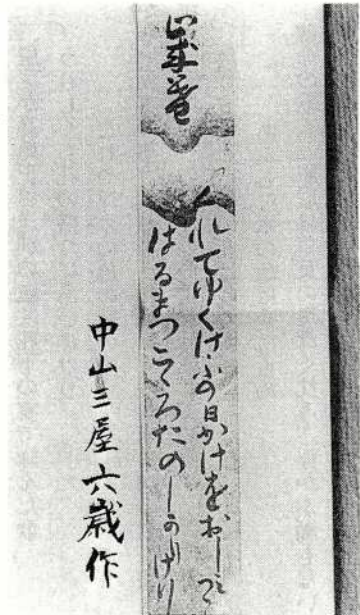
蓮月や敦子などは女流歌人として名を残したが、三屋の名があらわれなかったのは、若くして逝ったためであると高崎正風は述べている。



辞世の句入り墓(富田政所善宗寺墓地)

三屋尼存命の世相

欧米諸列強の接近に際して、国内では開国・攘夷論に明け暮れていた。ペリーの来航は泰平の眠りを覚ました。当時の歌に「陣羽織異国から来て洗いはり、ほどいてみれば浦賀(裏が)大変」とあるように国内は騒然として、人心の動揺は隠しようもない有様だった。ハリスとの日米修好通商条約・安政の大獄・桜田門外の変・禁門の変・長州征伐・四境戦争・薩長同盟・討幕の密勅・大政奉還・王政復古など三屋尼はこの動乱に生まれ、めまぐるしい政変の連続の世に、畏友矢嶋作郎およびその友同志は京と徳山、長州と薩摩を中心として三屋は税所敦子と矢嶋は大野直輔・



遠藤貞一郎らと意気投合し、和歌のたしなみを通じて暗躍を続けていった。

当時徳山藩でも正義派・俗論派との対立がはげしく、富山源太郎は宗藩の俗論派と通じて権をほしいままにし、これに対抗した河田佳蔵・児玉次郎彦・本城清・江村彦之進・浅見安之丞・信田作太夫・井上唯一らは俗論派のため圧迫され殉難した。(本城家・児玉家文書に参加資料・書状多数残存・市立図書館)。

その際矢嶋作郎ら同志の者が生き残ったのは、矢嶋は幕府に捕えられて板倉藩に三カ年幽囚されていたので難をまぬがれたという。

三屋は青春の黒髪をそって尼姿になり、矢嶋は幽囚の悶悶の日を送っていた。しかし幸にも板倉藩の碩学に接近する機会を得て大いに学ぶところがあり、他日再起の機に望みをかけていた。

三屋尼の畏友矢嶋作郎たち

矢嶋作郎は旧徳山藩士であり、天保一〇年生まれで、三屋尼にとって最も親交のあった協力者であった。

幕末の風雲が納まると一日も早く海外文化にあこがれ、欧米に留学した。徳山藩十代元功公は二二歳の時洋行。そ

の時の補佐役の一人に矢嶋作郎がいた。彼は英国滞在中ロンドンで経済学を修め、明治七年帰朝して紙幣寮助に任官し、日本政府最初の紙幣印刷に係わったという。

明治一〇年には官を退き、実業界に入り、東京貯蔵銀行・東京電燈会社等設立し社長となる。宮城の周囲と国会議事堂とにアーク灯をつけ世人の目を引いた。再度欧米を巡遊し下松銀行頭取として地方財界にも貢献し、公共事業えも力をつくした。

また桂城と号し和歌の道にも堪能で、三屋尼の歌集から一千余首とその他の詠草等からその友人高崎正風に抜萃させ、三屋死後三三回忌に際し発刊したのが「浮木廻亀」である。

三屋尼が高崎正風送別の嵐峡花下の宴で詠んだ歌
うれしくも花の盛りにあひにけり

これや浮木の亀の尾の山

から「浮木の亀」とした。正風はその巻末に次の歌を書き添え、三屋尼への追悼の心情を吐露している。

散りて後ことばの花は咲く春に

あふも浮木の亀にやあらぬ

薄命の歌人三屋尼は草葉の奥深く沈み、浮かぶ瀬もない運命のいたずらに悩まされながら、動乱の世に、語り歌い

ながら睦み交わした同志との最後の別れとはなった。

花びらは散っても花は散らないというが、肉体は散り果ても、言葉の花を咲かせてくれたのは、矢嶋作郎その人であったと言っても過言ではない。

矢嶋も功成り財を積んで、徳山地方の歌人知人を招いて善宗寺で供養し、裏山に辞世の歌を刻んだ墓碑を建て歌集「浮木廻亀」を参会者に配り遺詠を偲んだ。

愛国の志士と交わり、歌道に青春の炎を燃やしながら、父母兄弟とも縁薄く、孤独の身を三二歳の若さで旅枕に明け暮れて最後まで歌筆にいのちを託して果ててしまった三屋尼に対し、畏友矢嶋作郎が捧げた「浮木廻亀」はこの上もない手向けの詩心でもあった。

参考資料

一 三屋出生の謎

幕末尊王攘夷派の公家大納言忠能の第三子中山忠光卿の異母兄弟説もあり、その出生についてなぞとされている面もある。

中山忠光卿は文久三年（一八六三）攘夷勢力の先鋒として長州藩に大いに期待をかけ、船で長州に下る。長州藩の攘夷戦には光明寺党の首領格として参加している。ついで

同年八月には吉村寅太郎らに擁せられて、大和五条に天誅組の拳兵を行なったが、戦に敗れ、再び長州へ下り、翌元治元年（一八六四）、長州藩の恭順派の手によって豊浦郡の山中で暗殺された（年二三歳）。

また彼女の出生について取沙汰された理由に彼女の叔父に当る徳山市中山の戸倉光蔵宛の書翰が残存している。明治二年正月二一日付のもの。

初春の季節のあいさつの後に「一度御国（山口県徳山市中山）へも参り、どなた様へも御目もじいたし度のぞみ候へば、萬を差し置き、昨春三月京都を出立いたし、芸州宮島まで下り参らせ候ところ、御国禁きびしく他所の者は立入候事相成がたき由に承り、残念ながら致方なく、むなしく備後路まで立かへり、福山近くに逗留いたし居りまいらせ候。……私事も父事存生のうち承り置くはずの事ども、若年の頃にはなおざりに打過ぎ、只今は何者の子とも先祖さへ審かには存じ申さず、父事出はじめをわりの事も御地に参り、御をぢ様はじめ、御目にかかり詳しく承り度はその望みに御座候。

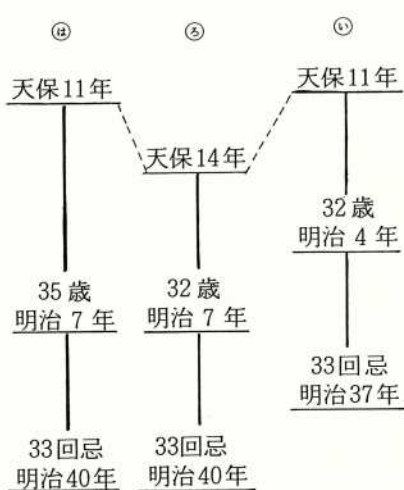
平常父は言葉少き人に候うへ、常々側にも居申さず故ついつい何事も承りおとし、今更後悔のみいたし居参らせ候。……」とあるように、三屋自身、自分の出生に疑問を抱

きながら過していたことがわかる。

現存の普通の書翰にも、萩・下関・湯本温泉まで来たことは書かれているが、中山に帰り、自己の出生について聞いたことは見当たらないのが惜しい。

次に出生・死亡についても諸説がある。

(出生) (死亡)



「浮木廻亀」の跋をもとに考察すると、明治四〇年に三三回忌であるから明治七年死亡となる。三二歳説を取ると

出生が天保一四年となる②。天保一一年出生(松村

清路説)をとれば三五歳死亡となり、彼の三二歳説と符合しない。年代記入の資料が残存していないためである。

中山三屋尼関係資料を掲げておく。

中山三屋尼遺影・短冊六歳作(一五歳まで一三枚・色紙(往事如夢)・菊の花を題にかけることば・書翰六通・軸物鶴、月に桜二軸・詠草(春風海上来)一冊・詠草

(元旦)一冊・旅百首・一日百首・一夜百首・をりにふれ事につきてかけること葉・草稿(漢詩)・旅日誌・

遺稿「浮木廻亀」・人名覚 以上は政所善甫清秀所蔵・その外書幅・絵と書・短冊など近辺に所蔵の方がある。

矢嶋作郎と中山みや子(松村清路)

出版されているものは「浮木廻亀」のみで資料提供していただいた善甫清秀・松村清路両氏に敬意を表するとともに、今後関係資料発掘された方に御提供をお願いする。

二 中山三屋の人名覚

矢嶋作郎等と共に和歌の道にことよせながら、京都を中心として、幕府の隠密の網の目をよそに公家・志士たちと神出鬼没の活躍のかたわら交わった人名を丹念に記入している。

この人名覚に記されている人たちは、陰に陽に世は刈こ

もと乱れ、あかねさす日もいと暗い時代に活躍した人々であつたといつてよいだろう。

歴史はややもすれば上に現われた人名は書き残されるがこうした思いを一にする人々も国の大事に誠を捧げた人々として永遠に語り継がるべきであろう。

次に人名覚について

備後は尾道御所町東屋半次郎から始まり三九名・三原五名・因島三名・大坂七名・福山一名・笠岡九名・備中三名・伊勢津藩三〇名・三河藩一四名・信濃藩一名・近江藩二名・尾張藩二一名・傳馬丁二二名・大津七名・桑名三名・熱田四名・名古屋一四名・薩摩藩三〇名・肥後熊本一七名・筑州藩五名・豊後三名・肥前七名・水戸藩九名・仙台一名・奥州一名・摂州一名・信州六名・和州二名・奈良一名・石州一名・加賀三名・越前三名・丹後福知山三名・会津藩一五名・播州二六名・江戸三名・京都一八名・泉州堺一名・土佐藩八名となつており、次に山口県関係の人物について記してみよう。

防州大島郡遠崎酒造鍵屋茂治右エ門、神職星出左近、表具師苫屋勘兵衛・柳井町嶋屋大二、柏屋音次郎、医師浅海鳳石・柳井新庄岩政篤太郎・余田村小原正蓮寺・富田政所岩崎庄左衛門・徳山藩金崎勘九郎・河合泰山・岩崎黙二、

小河勘藏・山崎隊中（徳山藩）不破勝無名藏・三吉幹輔・徳山藩内山正太郎・亀谷忠兵衛・亀谷周月・教学院南郷水津政雄・富田岩崎、佐伯（佐伯美敬？）徳山用達 萩かぢや町よし松新藏・防州山口三輪惣兵衛、津寺吉九郎衛門、福井忠助、三輪伊兵衛、竹下織衛、藤田弥之助、田原鉄藏、安富主鈴、近藤登一郎・萩八木隼雄、山根小源太、森弘祐之進、熊谷三四郎、白上章之進、井関源吾、藤井二郎、榎崎数馬、草刈弥三八、児玉五郎、山田重作、日国雅輔、大玉葆七、香川千藏、末永祥軒、木谷弥三郎、品川玄冲、飯田示雄、宮田兵馬、佐々木勝二郎、聴松尾幽草、大玉惣四郎、大玉忠之進、西村利右エ門、中村助右エ門、長山道雄、黒川玄茂、赤川玄樸・繪堂の藤井弥伝治・山口の安部孫左衛門、安部勝藏、林秀之助、楯取元彦・湯本の秋山玄珠、大谷哲之進・深川の天野介四郎・西市の中野半左衛門・萩の沢村卯之進、兼重権之進 以上五百名にのぼる人名が書きつらねられている。

これ等の人々とその土地に向いて誼を交わしたというのではなく、京都・大阪・九州などで遭遇した人々が多いのではないかと思われる。この人々の中には歌の道のみでなくその地方で維新動乱の世に活躍した人の多いことも想像に難くないと思う。